

イギリスの古典文学を翻訳・翻案・捏造する

長い18世紀におけるシェイクスピア、チョーサー、アーサー王ロマンス

原田 範行

長い18世紀イギリスには、古典古代の諸作品、およびルネサンス期からほぼ同時代に至る海外の文献の翻訳や翻案が遍在していた。本稿では、翻訳、翻案、あるいは捏造が、学問的・芸術的なものから生計の資を得る方便といったものに至るまで、さまざまな展開を見せる中で、それでは、イギリスの古典文学はどのように受容されていたのかということを、シェイクスピア、チョーサー、およびアーサー王ロマンスを軸に考察する。自国の古典に関する言語文化は、古典古代や海外の作品への意識と深くかかわりつつ、ナショナリズム、科学性の問題、出版文化の展開、公共圏形成などに深くかかわっていたと考えられるからである。

ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』には、こうした時代状況を活写した滑稽な場面がある。第5巻および第6巻の一節だ。語り手トリストラムは、書斎にある膨大な古典を読んでいる暇はないとして書斎の鍵を井戸に放り込んでしまうのだが、後にそのことを後悔する、という内容である。面白いのは、「恋の疼き」を語ったとされる虚実ないまぜの古代の文人たちの中に、『冬物語』に登場するボヘミア王ポルクセネスが紛れ込んでいること。シェイクスピアの『冬物語』は、長らく主要な舞台から遠ざかっていたが、1753年、デイヴィッド・ギャリックによる『フロリゼルとパーディタ』によって復活、その戯曲版が、『トリストラム・シャンディ』の第5巻、第6巻の6年ほど前に出版されていた。スターンが『トリストラム・シャンディ』の執筆にあたり、シェイクスピア劇を身近に感じていたことは、その引用がこの作品全体に散見されることから明らかであろう。18世紀半ば、古典古代の作品への虚実ないまぜの言及や怪しげな翻訳が頻出する『トリストラム・シャンディ』のすぐそばに、シェイクスピア作品があったのである。

長い18世紀イギリスにおけるシェイクスピア作品の受容と変容の特徴は、マイケル・ドブソンが指摘するように、改作 (adaptation) と正典化 (canonization) という、相反する二つの流れが共存していた、と言えよう。シェイクスピア作品は、例えば、当時著しく発達した小説にも大きな影響を与え、そのような形においても受容されていた。全集版の出版によってそのテキストを確定し正典化するという方向性とともに、小説の登場人物たちが自由な形でシェイクスピア作品への言及をおこない、それが、小説を読む読者の脳裏に刻み付けられていく、場合によっては、150年前の文人の権威に、18世紀の作家たちがひそかに寄り添う、そのような状況をも生み出していたのである。ジャンルを超えた引用や改作、翻案を生み出す時代精神と、そこから古典的正典が生み出される現象とは表裏一体のものであった。

こうしたシェイクスピア作品の受容について留意しておかなければならないのは、一般に「古典主義」の時代と称される18世紀において、そもそも何が、そういう「主義」を体現していたのか、という問題である。「古典主義」は、「ロマン主義」などと同様、それぞれの時代における概念語として存在していたものではなく、したがって、18世紀にあって、古典古代の作品や文化を主義として崇め奉るような、そういう精神性が強く意識されていたとは必ずしも言えない。しかしかりに、この「古典主義」のうちに、古典古代の作品をめぐる用語や表現についての詳細な注釈や解釈的研究があるとすれば、それは、聖書の言語解釈を含めて、まさに人文学の中心の一つとして既にルネサンス以前から存在したものであり、そうした訓詁学や釈義学の伝統、あるいは好古家の趣味が、長い18世紀においても受け継がれていたことは確かである。翻訳、翻案、捏造が有している分かりやすさ、あるいは今・現在に光を当てるモダニティとは別に、原典に向き合い、その性質を徹底的に解剖しようとするような探求心と精神性—そういったものをかりに「古典主義」と呼ぶならば、それは確かにこの時代に存在した。そして、そのような動向のうちに、シェイクスピア作品の本文校訂や説明作業が含まれるとすれば、それは、シェイクスピアの原典への意識が、科学性を帯びて新たな展開を示していたことになる。翻訳、翻案、捏造を扱うシンポジウムにおいて、イギリスの古典文学の成立事情という参照軸を導入しようとする理由はまさにこの点にある。古典古代の作品を、あるいは同時代の外国語文献を、翻訳、翻案、捏造する、という動向には、原典をかなり自由な形で受容するという傾向と同時に、そういう自由さとは別の、ある種の科学性を帯びたベクトルが機能し始めていたのではないか。

ジェフリー・チョーサーの諸作品が、ジョン・リドゲイト、エドモンド・スペンサー、シェイクスピアを経てジョン・ミルトンやジョン・ドライデンらに継承されたことは言うまでもない。18世紀に入ると、そうした系譜がいったん途絶えるかのような印象があるが、必ずしもそうではない。1721年には、ジョン・アーリによる『チョーサー全集』が有力書店リントットから刊行され、また1742年には、「数名の文人による現代版」と称する、いささか怪しげな『チョーサーのカンタベリー物語』が、ダブリンのフォークナー社から刊行されている。有名な『英語辞典』に付した「英語の歴史」の中にチョーサーの中英語の原文を引用したサミュエル・ジョンソンは、亡くなる直前、チョーサー全集編纂の構想を細かく記してもいる。

長い18世紀イギリスにおいて、チョーサーを翻訳する、とはどのようなことを意味していたのか。彼を「英詩の父」と呼んでその作品を翻訳し、また、『古代と現代の寓話』への序文などにチョーサー論を展開したドライデンは、このことを明確に述べている。彼によれば、チョーサー作品を現代英語に翻訳する意味

は、その翻訳がある何か新しいものを生み出す力を有しているからである、という。古典古代の作品に関する翻訳・翻案の長い系譜に、チョーサー自身の翻訳と創作を位置づけ、そうしたチョーサー作品を翻訳するドライデン自身の翻訳行為を接ぎ木していると言えよう。ドライデンが、中英語の発音をよく理解せず、チョーサーの韻律に違和感を覚えていたことなどは既に指摘されている通りだが、しかし重要なのは、自国の古典文学の翻訳者としてのドライデンが、翻訳を、文学表現のある種の積み重ねによってのみ生み出される安定した新しさを有するものであり、それを担保する翻訳者の自由が認められなければならない、と考えていたことである。1742年刊行の『チョーサーのカンタベリー物語』が、いささか怪しげながらも読者に膾炙していたのは、まさにこうした文学受容における自由さが際立っていたためであろう。この翻訳・翻案集を刊行したダブリンのフォークナー社は、1735年、『ガリヴァー旅行記』の決定版を含むジョナサン・スウィフト全集を刊行した出版社でもある。チョーサーの『カンタベリー物語』がスウィフトの『ガリヴァー旅行記』と共存する一それが、当時の文学的状况を示す光景の一つであったことを想起しておきたい。

アーサー王ロマンスの場合はどうか。長い18世紀イギリスにおいて流布していたアーサー王関係の表象には、主に次のような系統がある。まずは、リチャード・ブラックモアの長編叙事詩『プリンス・アーサー』。ケルトの英雄アーサーがサクソン人を倒すというもので、名誉革命後に王位に就いたウィリアム3世をモデルにしたものだ。それから、ドライデンによるオペラ『キング・アーサー』。これはもともと、チャールズ2世即位と王政復古25年を祝うものとして1685年の上演を念頭に構想されたが、この85年にチャールズ2世が死去。その後、名誉革命に至る動乱の中でしばらく放置され、1691年、パーセルの楽曲をあわせてようやく上演を見ることになった。この楽劇は、その後幾つかの改変を経て18世紀いっぱい演じ続けられている。シェイクスピア没後150年祭直後にはギャリックが加筆修正を手がけてもいる。さらに18世紀末になると、ジャックという、アーサー王宮廷で歓待されアーサー王の息子と遊んだというコーンウォール出身の少年が、巨人たちを倒しに出かけるという『ジャックと巨人たちの物語』といった作品も刊行されている。このほか、アーサー王伝説に登場する予言者マーリンの話などは、18世紀にあってもしばしば登場する。

アーサー王ロマンスの受容史において18世紀イギリスは不毛の時期と見なされることが少なくないが、このように見てくると、決してそうであったわけではないと言えよう。少なくとも、先述した1742年刊行の怪しげな『チョーサーのカンタベリー物語』において、ドライデンが、そしてポウプが試みた翻案あるいは捏造に近い物語と同種のものが、アーサー王ロマンスについても流布していたと見てよい。アーサー王ロマンスの場合、19世紀初頭には、トマス・マロリーの『アーサーの死』が廉価本の形で刊行され、マロリー作品の本文校訂を軸としたアーサー王ロマンスの受容が本格化するが、このことは、既に18世紀から本格化していたシェイクスピア全集や、後の本文校訂に道筋をつけたトマス・ティリットによるチョーサー全集が1775年から78年にかけて刊行されたという状況と近似している。さらに注目すべきは、ブラックモアの叙事詩にせよ、ドライデン＝パーセルのオペラにせよ、少年ジャックの巨人討伐にせよ、あるいは予言者マーリン言説の流布にせよ、それらは、シェイクスピアやチョーサーに依拠しつつもその作品を自由に改作していた18世紀の精神風土と軌を一にするものではないか、ということである。しかもアーサー王ロマンスの場合、それは国家や王権を示すものとして機能しやすかった。ブラックモアの叙事詩とドライデンのリブレットが、ともに国家と国王の姿を中心に据えていたことはその表れであり、それは19世紀に至って、例えばアルフレッド・テニソンの『国王牧歌』を生み出すような中世主義の源流の一つになっているとさえ考えられる。

ただここで留意しなければならないのは、シェイクスピアにせよチョーサーにせよアーサー王ロマンスにせよ、概ね18世紀半ばを境として、そうしたイギリス古典文学の受容が、本文校訂を軸とした原典主義というべき方向にシフトし、それを印刷出版文化が支えたということ。そしてその中で、翻訳、翻案、捏造のその先に、原典を確認し、精緻に理解しようとする科学的精神が高揚し、改めて原典を正典化しようとする傾向が見えてくる、ということである。18世紀後半になって顕著になる各種の全集やアンソロジー出版の動向もそうした傾向を体現していた。そしてもしその先に、イギリス文学の伝統に即したナショナリズムが想起されるとすれば、イギリス古典文学の翻訳、翻案、捏造をめぐる長い18世紀の多様性は、そしてそこに見られた公共圏での闊達な創作活動は、結局、そうした方向に収斂することになると言えるのかも知れない。

だがここで最後にもう一つ、注意すべき点を指摘しておきたい。死の直前、ジョンソンがチョーサー全集編纂を考えていたことは既に触れたが、ここで忘れてはならないのは、ジョンソンがこの計画書の中で、チョーサーが物語を作る際の「自由さ」を明らかにしたい、と述べていることである。精密な本文校訂を希求する駆動力のその端緒に、作家と作品が有する自由な想像／創造をジョンソンは据えていた。そしてそういう彼の周囲にあったのは、チョーサーのさまざまな翻訳、翻案、捏造作品であり、また、マロリーに光をあてた19世紀初頭の『アーサーの死』の編者たちの周囲にあったのも、さまざまな形で流布していたアーサー王ロマンスの捏造品なのであった。そしてシェイクスピアについて言えば、精緻な本文校訂の展開とともに、それをまた新たに脚色した舞台が、そして作品が登場することになる。長い18世紀イギリスにおける自由闊達な公共圏が有した可能性とは、つまり、こうした原典の真実に迫る科学的精神をも駆動させるエネルギーを有していたことであり、この時代の翻訳、翻案、捏造は、そうしたエネルギーを豊かに惹起するものにほかならなかったのである。